高田教区宗祖親鸞聖人
七百五十回御遠忌テーマ・
教区教化テーマ

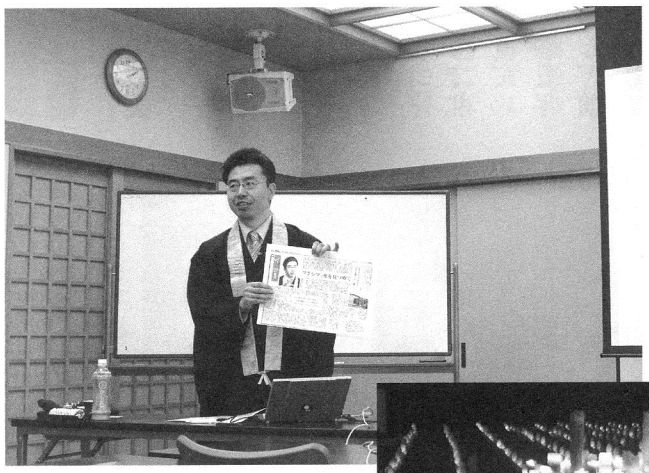
私はどこで生きているのか
～たずねよう 真宗の教えに～

高田教区報

響流

第125号

発行所
上越市寺町２丁目24-4
真宗大谷派 高田教務所
編集　響流編集委員会
発行　森田成美
印刷　サクラ印刷㈱



講師の中下大樹氏

船に乗って金華山まで（寄磯浜）

追悼の意を込めたキャンドル（山古志にて）

「社会問題研修会『大震災と宗教』を受講して」

第七組法泉寺　虎石　薫

「無縁社会というのは適切な表現ではありません。縁あって、父親と母親が一緒になり私が生まれた。生まれてこなければ『死』もありません。問題なのは、縁が無いのではなく、縁がうまく機能しなくなっていること。言うならば『絶縁化社会』でしょう。」と、講師の中下大樹さんは指摘しておられました。

興味深かったのは、津波に遭われた方々が、水が引いた後に安否を確かめに行った所のお話で、特に多かったのは「自宅・墓・神輿」だったそうです。お墓は血縁という縦糸になり、お神輿は地縁という横糸になり、それぞれ紡がれ織り込まれ、その織り目の一つひとつのように、各々が屋根の下に身を寄せて生活を営んでいる。自然の力によって断ち切られそうになっても、自らの糸口を確かめに人々は動いたのです。

受講しながら思い出したのは「私はひとりで生きない」という宣誓でした。これは、二〇〇九年に長岡市山古志地区で住民の方々が主催した「災害犠牲者追弔会」の際、掲げられた誓いの一つです。血縁や地縁との、関係することで生じる摩擦も引き受けて生きていくという覚悟の強さと固い絆を感じて、当時参加していた私はガツンとやられました。ただ、強固な絆に縛られて、身動きできなくなることや息苦しいこともあるのではないかと、私自身は気詰まりを感じていました。中下さんの現地報告の中にも、支え合っている絆が逃れられないしがらみに変わった時に、縁を断ち切って「独り」になってしまう人たちのお話がありました。

先日、高田教区震災支援有志会の一員として、福島県二本松市の眞行寺と宮城県石巻市寄磯浜の仮設住宅を訪ねました。有志会のメンバーからも、しがらみによって親子や家族や隣人との関係にこわばりが生じているという側面を知らされていました。その場の空気に触れ、一人ひとりの方々と会話して感じたのは、前向きでしなやかな気配でした。私がその場に行って、話したり笑ったり、飲み食いしたりする中で、それぞれに地縁や血縁を背負った「一人」と「一人」は、どの糸口とも結びつくことができる自由さを持っていて、緩やかに結わえることで「独り」にならないことを感じてきました。

私たちには計り知れない広大さと繊細さで、生命の織り成す模様は設計されているような気がします。自分が何を担っているかは、自分の頭で分かるものではありませんが、これからは、少し丁寧に、絆をほどいたり結い直したりしていきたいと改めて考えました。

教務所長挨拶

高田教務所長　森田　成美

この度、二〇一二年六月二十九日付をもちまして、高田教務所長、兼ねて高田別院・新井別院輪番を拝命致しました。

一九八七年から二〇〇五年まで北陸連区内で駐在教導を勤めさせていただいておりましたが、二〇〇五年十一月に能登教務所長を拝命し、前任地の仙台教区と、教務所長としては三教区目であり、経験も浅く、力及ばないことが多々あることかとは存じますが、高田教区のお一人おひとりから叱咤激励をいただき、その任を務めて参りたいと存じますので、宜しくお願い申し上げます。

前任地の仙台教務所長在職中にあっては、二〇一一年三月十一日に発生致しました、東北地方太平洋沖地震によります東日本大震災に際し、発生当初から今日に至るまで連綿として心強いご支援をいただいておりますこと厚く御礼を申し上げます。

当高田教区にあっては、有志の会の方々による被災地への炊き出し等のボランティア活動、また、教区事業としてのキッズふくしまサマーキャンプ・スプリングキャンプと、被災された方々に寄り添って心暖かいお取り組みをいただいておることであります。仙台教区から高田教区へと任地は替りましたが、被災された方々のことを決して忘れないという一点を肝に命じ、皆さまと歩みを同じくしていきたいと思います。

さて、昨年は真宗本廟に於ける宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌並びに御正当報恩講が無事お勤まりになり、二〇一二年度は同朋会運動五十一年、宗憲改正三十一年の年であり、安原宗務総長は、『私は、本山御遠忌後の二〇一二年度を「次なる一歩を踏み出す年度」と位置づけました。』と述べられております。その次なる一歩の取り組みとして、「第二回門徒戸数調査」と「第七回教勢調査」が十月一日を調査期日として実施されます。門徒戸数調査は御依頼割当基準の要素となり、教勢調査は、単純集計及び従前の結果等との比較分析を行い、教化施策を展開する上での基本資料として活用されますので、両調査が十全に行われますようご協力の程よろしくお願いいたします。

また、御依頼割当基準策定委員会からの答申を受け、二〇一三年度からの新割当基準の要素とその比率が、第二回門徒戸数調査で得られた門徒指数を総御依頼額の七割、一九九五年度から二〇一〇年度までの計十六ヵ年間の御依頼平均値を御依頼額実績として二割、宗派の運営の主たる収入である経常費の一定額を、全ての寺院・教会に等しく責任を持って担っていただく寺院均等割を五分、地域における経済格差を考慮するために経済指標を五分とすることが示されました。

また、教化の中心拠点たる「真宗教化センター」については、二〇一四年度中の開所を目標に、寺院、組、教区そして本山（宗務所）が、有機的な連携をはかり、センターがその中核となって教化活動がさらに展開されるよう、構想の実現に向けて取り組まれてまいります。

次に、二〇一二年度の高田教区の教化施策につきましては、本年度は「第十一次三ヵ年教化研修計画」の実施年度として、教区教化テーマ、教区御遠忌テーマを「私はどこで生きているのか　～たずねよう　真宗の教えに～」として、教区内全ての僧侶が課題を共有し「教区御遠忌」に向けて、充実した取り組みとなるよう進めてまいります。

次に「高田教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌基本計画」について、昨年八月から高田教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌推進委員会において協議がなされ、法要日程を二〇一八年四月十八日から二十四日までとし、高田・新井両別院で厳修され、二十二日は公共の施設を用いて記念大会が行われます。

また、記念事業として、高田別院山門修復、高田別院納骨堂改築、新井別院本堂屋根修復等が挙げられておりますが、総計画案を策定次第、説明のための巡回を行ってまいります。

さて、最後に二〇一一年度の御依頼につきまして、経常費、宗祖御遠忌・御修復懇志金共に超過完納を賜わりました。経済状況が悪化する中、この様な御収納を賜わりましたことは、ひとえに教区の皆さまお一人おひとりの法義相続、本廟護持の厚い御懇念によりますことと深々の感謝と御礼を申し上げることであります。

今後とも御指導、御鞭撻下さりますようお願い申し上げます。

前教務所長の杉本了恵氏は、二〇一二年六月二十八日付で退職しました。

第143回教区会（通常会）及び第60回教区門徒会（通常会）報告

下記議案について慎重審議の結果、可決され承認されたので報告いたします。

第１号議案　2012年度宗派経常費御依頼額算出基準案
第２号議案　2012年度高田教区教区費御依頼額算出基準案
第３号議案　2011年度高田教区経常部歳入歳出決算書
第４号議案　2011年度池の平青少幼年センター会計歳入歳出決算書
第５号議案　2011年度高田教区出版会計歳入歳出決算書
第６号議案　2011年度高田教区共済会計歳入歳出決算書
第７号議案　2011年度高田教区聖跡顕彰会計歳入歳出決算書
第８号議案　2011年度高田教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌推進事業特別会計歳入歳出決算書
第９号議案　2011年度高田教区真宗教化研鑽室「聞思学場」特別会計歳入歳出決算書
第10号議案　2011年度高田真宗学院会計歳入歳出決算書
第11号議案　2012年度高田真宗学院会計歳入歳出予算
第12号議案　2011年度高田教区役宅運営会計歳入歳出決算書
第13号議案　2012年度高田教区役宅運営会計歳入歳出予算
第14号議案　2011年度高田教区特別事業積立金会計計算書
第15号議案　2011年度池の平青少幼年センター施設整備積立金会計計算書
第16号議案　2011年度高田真宗学院運営積立金会計計算書
第17号議案　2011年度高田教区伝道車積立金会計計算書
第18号議案　2011年度高田教区共済積立金会計計算書
第19号議案　2011年度高田教務所員転退職慰労金積立金会計計算書
第20号議案　2011年度高田教区東北地方太平洋沖地震・福島第一原子力発電所事故被災者支援会計計算書
第21号議案　高田教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌基本計画に関する件
第22号議案　高田教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌推進委員会規程の一部を改正する規程案
第23号議案　第２回門徒戸数調査による調査結果の公開の同意を求める件
第24号議案　2012年度高田教区経常部歳入歳出予算
第25号議案　2012年度池の平青少幼年センター会計歳入歳出予算
第26号議案　2012年度高田教区出版会計歳入歳出予算
第27号議案　2012年度高田教区共済会計歳入歳出予算
第28号議案　2012年度高田教区聖跡顕彰会計歳入歳出予算
第29号議案　2012年度高田教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌推進事業特別会計歳入歳出予算
第30号議案　2012年度高田教区真宗教化研鑽室「聞思学場」特別会計歳入歳出予算

教区門徒会改選

四月一日から新しい教区門徒会員の任期が始まりました。

第1組　西光寺門徒　田原　久人
第1組　長願寺門徒　小山　信正
第2組　善正寺門徒　恩田　良則
第2組　常圓寺門徒　馬場　久義
第3組　西性寺門徒　五味川千秋
第3組　光榮寺門徒　山本　喜一
第4組　淨善寺門徒　笹川　大
第4組　持專寺門徒　山本　勝
第5組　林覺寺門徒　小林　義之
第5組　寶善寺門徒　青木　正教
第6組　得願寺門徒　吉田　勉
第6組　光運寺門徒　岸波　敏夫
第7組　極生寺門徒　安藤　喜悦
第7組　廣建寺門徒　三上　治平
第8組　覺善寺門徒　平野　宏
第8組　淨音寺門徒　長谷川一英
第11組　鞍馬寺門徒　村松　勝蔵
第11組　本教寺門徒　田中　栄一
第12組　横超寺門徒　小池　利男
第12組　福正寺門徒　長谷川則昭
第13組　本善寺門徒　髙森　勉
第13組　最尊寺門徒　西脇　弘

去る四月十七日に臨時教区門徒会が招集され、各役職の選出が行われました。

会長　五味川千秋
副会長　平野　宏
常任委員　田原　久人
恩田　良則
山本　勝
小林　義之
岸波　敏夫
安藤　喜悦
髙森　勉
田中　栄一
補充員1　長谷川則昭
補充員2　笹川　大
参議会議員　小池　利男

今回は、正副門徒会長、参議会議員にコメントをお寄せいただきましたのでご紹介します。

「教区門徒会会長就任にあたって　初心にかえる」

高田教区門徒会長
第三組西性寺門徒　**五味川千秋**

去る四月十七日開催の第五十八回教区門徒会（臨時会・組織会）に於いて三度教区門徒会長に互選され責任の重さを痛感しております。

会議会場に入ると正面に会長のネームプレートと机が用意され空席になっており、もう私はあの席に座る事はないであろうと思っておりました。過去任期三年間で二期六年間自分では一生懸命職責を全うしてきたつもりです。しかし周りの方々に迷惑をかけ、お荷物を背負わせたかもしれません。唯一自分の誇りは数ある会議（年間七十回位）には欠席せず出席できた事、そして自分の考えを申しのべた事です。

これは皆様から与えられた職務を名前だけでなく全うする責任があると感じた事です。当たり前とはいえ大変です。今、教区、別院では教区御遠忌法要や教区、組の改編を初め、大きな課題をたくさん抱えております。次から次へと課題宿題が出て来る事は当然でしょう。それらを全員で智恵を出し合い話し合って解決して初めて教区、別院の発展につながる事でしょう。

今私が最も気にかけていることは教区門徒会長として三期目という事になれば「慣れてきたから気が緩む」という事です。これは何の職責でも企業でも同じ。これを期にゼロからのスタート「初心にかえる」新入社員の気持ちを忘れず、与えられた職務を全力で頑張ります。皆々様の御協力、御指導重ねてお願い申し上げます。

合掌

「教区門徒会副会長就任にあたって」

高田教区門徒会副会長
第八組覺善寺門徒　**平野　宏**

この度、第五十八回高田教区門徒会（臨時会・組織会）の役員改選にあたり、教区門徒会副会長を仰せつかりました平野でございます。

もとより、身に余る大役にいささか躊躇いたしております。微力ではございますが、その責を果たすべく尽力をいたす所存ですので、教務所長様はじめ関係各位ならびに教区門徒会員の皆様のご指導、ご協力を賜りますよう衷心よりお願いを申し上げます。

三・一一震災から一年余が経過いたしました。高田教区としても被災者支援の活動が積極的に展開されております。

私達はいつも死と隣り合わせで生かされていること、何があってもおかしくないこと、そして平穏無事の有り難さを改めて思い知らされまし

た。今、私達をとりまく環境は政治経済、社会、宗教、人々の物の考え方など大きな転換期を迎えているように思われます。

三万人を超える自殺者、老人の孤独死、悲惨な殺傷事件と暗いニュースが目立ちます。このような時代を生きる私達は、真宗門徒として宗祖のお導きをいただきながら、連携を密にして、念仏のある生活、同朋会の活動の更なる実践を推進したいものと思います。就任にあたり、教区ならびに門徒会の充実振興に、いささかでも寄与できればと願っているところであります。

「参議会議員に再選されて」

参議会議員
第十二組横超寺門徒　**小池　利男**

去る四月十七日、教区門徒会で再度参議会議員に選出され、これからまた三年間高田教区門徒会の代表として直接宗政に参画することを思う時、身の引き締まる思いをいたしております。

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌も終わり、これからはいよいよ教区並びに組の改編、そして本山割当基準の見直しが行われます。どれもみな門徒に直接深い関係があるものばかりでございます。

門徒の代表と力を併せて門徒会の発展並びに宗門の興隆に微力を捧げてまいりたいと存じます。

どうか諸先輩各位の一層のご指導ご鞭撻をお願い致します。

「愚者は経験に学び…」

参議会議員
第四組淨善寺門徒　**笹川　大**

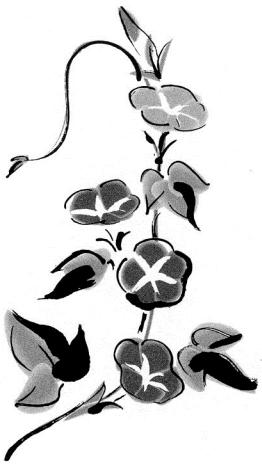
このたび、不肖私ごとき者が参議会議員に選任され、仏教の道に足を踏み入れて間もない経験浅き自分にとって、この大役を拝命することはまさに青天の霹靂の心情であります。

何事も自分本位の考えを持つ人が多い現在の社会において、身分の隔ても、男女の区別もなく、罪深き人などすべての人々を抱きしめ、浄土へ迎えようと固く誓われた仏様の阿弥陀仏の慈悲にお願いする「南無阿弥陀仏」という念仏は、果たして皆さんに理解されるのかと一抹の不安が脳裏をかすめるときもあります。

然しながら、念仏とは自分で称えるものではなく、弥陀から頂いたものであると信じ、親を思う心と仏を思う心は同根から芽吹いてくるという純粋な人間としての感情を持ちたいものであります。

ドイツの鉄血宰相ビスマルクの言葉を借りれば「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」といわれてますが、手痛い経験から教訓を学び、歴史の中から危機に対処する術を得ていきたいと考えております。

いずれにしても、浅学非才な自分にはあまりにも重責な大命でございますが、関係住職並びに門徒各位の切なる御指導とご協力をお願い致すものであります。



センター活動報告

長く厳しい冬を終え、今新緑の季節を池の平青少幼年センターは迎えています。

センター主催行事を開催する事を通じ、そこに集う人達に新たなつながりが生れること、またセンターの存在を知っていただく事を願い、これまで開催されてきました。このたび開催された、二つの行事（バードウォッチング二〇一二年五月二十六日～二十七日、トレッキング二〇一二年六月五日～七日）にそれぞれ参加者された方の声を掲載させていただき、主催行事の内容をご報告させていただきます。

笹ヶ峰の清水ヶ原で残雪をみながらの探鳥会

「探鳥会に参加して」

東京都　千賀　奈津子

まだ私が小学生かそれより前のこと。バードウォッチングを始めたばかりの父に連れられて、よく鳥を見に行っていた。地名はよく覚えていないが、空気が澄んで耳が痛くなるくらい寒い土地の湖に、とてもきれいな白鳥が、数羽華麗に泳いでいた。

冬の優しい朝日に照らされた白鳥はとても美しく神秘的ですらあった。そこで私がすかさず父に「見て！白鳥がいる！」と指をさして言うと、父はニコリともせず「違う。あれは大白鳥だ。この世に白鳥なんて鳥はいない。大白鳥か小白鳥だ。」と指摘した。

正論なのだろうが、幼い娘の感嘆の声にそこまで無下な言い方は父親として、いや、一人の大人としてどうなのか、と腹が立ったが、正直気持ちの半分くらいは「へぇ、そうなのかぁ。」と驚いていた。

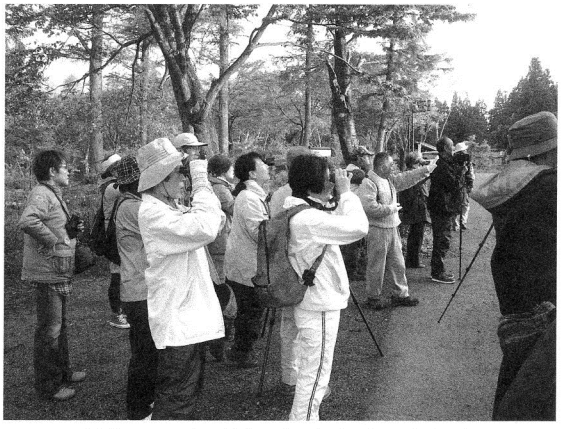
そんな父と久しぶりにバードウォッチングに行くことになった。母と友達も一緒に、玄人の探鳥会にお邪魔させて頂くことが出来、とても楽しみだった。普段の土日なら真夜中と思うであろう時間に起きて、ひたすら鳥を探す、見つける、双眼鏡の中に入れ（これが素人にとって第一関門）じっと観察する。ぐっと近づいた視界に映る鳥たちは実にエキサイティングであった。キビタキの黄色はとても鮮やかで、アカゲラのお腹は、はじめ流血しているのかと錯覚した程真っ赤で、ホオジロは本当に頬が白い。鳴き声も多様で講師の方々が色々教えて下さった。

鳥は鳥。しかしそれらの一つひとつを辛抱強く観察すると、色鮮やかで、種類ごとの個性がはっきりと見て取れた。

講師の池田先生が「鳥見は全くお金をかけることなく始められる趣味だ。」と仰っていたが、この探鳥会に参加してからというもの、鳥を見かけるとじっくり観察してしまう。朝方、鳥の鳴声で目覚め、じっと耳を傾けてしまう。

今まで近くにあって意識してなかった新しい世界を見つけた気分である。

講師の方をはじめこの会を企画運営して下さった皆様方、大変お世話になりました。ありがとうございます。



早朝のいもり池で探鳥をする参加者

「センタートレッキングに参加して」

神戸市　福永　純子

「新緑と残雪の上高地と乗鞍高原滝巡り」に初参加させていただき、心に残る楽しい旅を本当にありがとうございました。

新幹線で神戸～名古屋～長野と乗り継いで、妙高高原駅に辿り着き、山形（鶴岡）からの姉と合流できてホッと一安心。センターの仏間での開会式、オカリナの音色に「同朋なんだ！」と感激、山菜豊かなおいしい夕食に主婦の身であることを忘れ、若やいだ気分でいっぱいでした。

センターの目の前に大きくデンと聳える妙高の残雪と白樺の樹の白さが眼に眩しかったです。

上高地、焼岳、大正池、河童橋と地図上の名前が一つにつながり、小さな花々に癒され、大きな草丈の水芭蕉に驚き、樹上のムクムク毛並のお猿の赤ちゃんとの遭遇には本当にビックリでした。

澄みきった梓川の水、熱々の春秋汁の振舞い、豪快な乗鞍高原三本滝。どれもこれも素晴らしかったです。「来年も参加できますように」と足を鍛えてます。日本の東から西からと・・・姉妹が池の平で出会うという夢の様な機会をありがとうございました。

大正池にて　焼岳を背に…

聞思学場
―研究生意見発表―

「自分の課題」

第五組覺真寺　藤戸　美帆子

今、私は聞思学場に研修生として参加しています。

なぜ参加したのかというのは、学びを深めたいということと、宗教というのはどういうものかということを知りたかったからです。

というのは、私は結婚して寺に来たのですが、その前は宗教とは無縁の生活を送っていました。実家には仏壇も神棚もなく、寺も神社も同じものだと考えていました。宗教と聞くと怪しそうなもの、だまされてはいけないものというイメージが強かったです。今でも拭い去れないイメージではあります。

そんな中結婚し、新潟まで来たのですが、まあ何とかなるだろうという考えは甘かったようです。

思い描いているように進まないことは百も承知であるつもりだったのですが、想像以上に進まないのです。ちゃんとしなくてはと思えば思うほどどうにもできない自分を発見し、落ち込んでしまいます。

真宗のことを勉強して自分で表現することができるようになったら変わるかもしれないということで、夫の勧めもあり、専修学院に一年間行き、教師資格も取りました。行っている間は真宗漬けということもあり、分からないなりによく勉強しました。知らない知識を、考え方を、見方を知るのはとても楽しかったし、有意義でした。これで新潟に戻っても、話についていける、と思ったものです。

そして一年間を終えて、新潟に戻るとまず、月忌参りを始めました。門徒さんの顔を知りたかったのと、私も何かをしているのだという実感がほしかったからです。門徒さんの顔を知ることができたのはとても良かったです。報恩講や、永代経法要などの集まりでの知らない人の中にポツンと居続けなければならない苦痛がなくなりました。地理も大体覚えることができました。

そして今の私がいます。宗教無縁生活から宗教の真っただ中にいます。私の宗教は浄土真宗なので、念仏の生活が課題になってきます。すなわち聞法するということです。それが難しいです。

と言うのも自分で自分を決めつけたりしてはいけないのですが、私はどうも興味のないことを探究しようとしないようです。講演会などに行っても、疑問や感想を自己完結してしまいます。夫と語り合ったりしますが、やっぱり自分の結論で心に留めておきます。聞法できてないなあと思うので、意識して聞くようにしてはいるのですが、自分の意識を、そして見方を方向転換させるのは、自力では無理なのだろうと思うようになってきました。分かるまで聞く、ということを続けたいなと思うのですが。

そこで、大事になってくるのは座談だと思います。聞思学場でも講義の後に座談会があります。同じ講義を聞いていても違った捉え方をしていたり、自分の意見がうまく伝えられていないのかな、と感じたりしています。たとえ座談で他の人の意見を聞いたとしても、心の中で、自分の意見と対比させ、そこでも自己完結させてしまうことがほとんどです。これではなかなか座談は成り立つことはないなと思います。「物をいえいえ」（『蓮如上人御一代記聞書』）という言葉が身に沁みます。

一つのことを一人ひとりが違う見方をする、同じ見方はできないということはとても興味深く、語り合う上で、大切なことだと思います。それでもなお共有しようと、共感したいと思うことを感じるのです。

しかし、そこを深く追求することを諦めてしまう自分が圧倒的です。さもすれば何故、私の意見が通じないのか、分かってくれないのかと他に転嫁しようとしてしまいます。それが今、省みたときの私です。

ここから見えてくる私の課題は、「聞く」ということではないでしょうか。そして自己完結させて納得してしまう私も見えてきます。聞き、頷いていく。その行為を目標として、できない自分に気づいていく。それが自分の仏道であるのかなと最近思います。

聞思学場はあと二年あります。講義・座談を通して自分の中の課題がどう移り変わっていくのか。『宗祖親鸞聖人』に学びながら確かめていこうと思います。

『響流』編集委員会からの依頼原稿、並びに、お寄せいただいた原稿については、漢字の使い方・言いまわし等、できる限り執筆者の表現を尊重して掲載させていただいております。

参加者のひろば

教学研修会

「『思い』にとらわれて生きる私」

第六組法林寺　礪波　翔

私は今春、大谷専修学院を卒業しました。実はこの「現代に問われる教学から」というテーマのもと、学院長である狐野秀存先生をお招きした教学研修会は、卒業のわずか一ヶ月後に行われたものでした。そのため、先生にお会いできることを嬉しく思うと同時に、卒業後の自らの生活を見なおす機会にもなりました。

講義では先生が「雪国の生活を知らない人は浄土真宗はわからないのでは？」と冗談交じりに仰ったことが、私の中に印象深く残っています。「雪」という理不尽な問題を解決しなければ生活が始まらないという事実は、凡夫の身をどう生きるか、とする浄土真宗のようだ、と思われたからだそうです。ですが先生は、「思いの雪」は、どんな場所でも降っていると続けられました。「思いの雪」とは理不尽でどうにもならない、自分の思い通りにいかない、まるで豪雪のような事柄を喩えた言葉です。

この研修会に出て、自分中心の生き方に気付かされた一年間の学院生活が終わり、いつの間にかまた「我が思い」を中心に生きている自分の姿が見えてきました。

折角、仏法に縁を頂いたのに自分中心で法に背く生き方をしてしまっている、このことを問い続けなければならないと改めて思いました。

伝道研修会

「『大経』に浄土を聞く」

第一組光徳寺門徒　水沼　清和

「『大無量寿経』というのは、経道滅盡（きょうどうめつじん）の世に生きる者のために説かれた経である」という大島先生の言葉から始まった伝道研修会の講義。化身土巻に

末法の中においては、ただ言教のみありて行証なけん

（『真宗聖典』三二六二頁）

とあり、教も念佛という行も飾り物でしかない。これが経道滅盡であると。

今、当にこの私達の世界がその時だと思う。地震、原発、福祉、どうすべきかという事は見えているのにどうにも前に進まない。明けない夜はないというけれど、今という夜は何時になっても明ける気配さえない。

では、どうすればよいのか。親鸞聖人は、国として個人として、身の事実を受け止めよと。そして、深く内省し慚愧せよと。信心せよと。藤元正樹先生は「真宗は信心をまことのこころと読む。佛が私達を救うのではなく、佛を信ずる心・まことのこころがその者を救うのだ」と。

私はこの娑婆は大河だと思う。そこに大きな船があり、誰でもが乗れる。その行き先は地獄かもしれないが、たぶん真如海だと思う。私は乗る。乗るか乗らぬか、今、各々に問われている。

推進員研修会

「推進員研修会に参加して」

第十一組一念寺門徒　金井　英孝

多くの推進員は住職に勧められて「真宗大谷派の推進員」となった。推進員になるのが目的ではなく、推進員になって活動することが大切なことであります。しかし、どのような活動を行ったならば良いか糸口すら見つけ出せずにいることが多いのではないかと思います。

今回の研修会は、各組から推進員協議会の概要（寺院数・推進員数）、役員と組織、行事と活動、同朋会運動についての現況と、それぞれの組、

寺院の活動について発表をいただきました。このことは、参加した推進員の活動の参考になりました。

各組の寺院で同朋会運動が進んでいる。でも、まだ運動が出来ないところもあります。これらの活動を誰が主導・リーダーシップを執るか、問題は山積しています。

推進員は寺院の講、集会、研修会に進んで参加し、自らの学習と共に周囲の人を誘い、寺院に集える機会をより多くの人（門徒）に勧めていくことが役目の一つと思います。一歩でも進んでいくことが大切と感じました。

男女平等参画を考える研修会

「男女平等参画を考える研修会に参加して」

第六組善念寺　滋野　美智子

突然「お昼を食べに出ない？」と、夫に誘われました。春から末娘も保育園に通って時間もできたのでOKすると、食後に車が向かった先はなぜか寺町でした！

高田別院の本堂に入ると「男女平等参画を考える研修会」の講題がかかっていました。

日頃からこういう場に慣れていない私には少々重い感じもしましたが、せっかくの機会でしたので参加させていただきました。

講師の草野龍子先生は「男女平等参画」について、ご自分の生い立ちから今までの経験を交えて、わかりやすくお話しくださいました。

研修会の中ごろには、ジェンダーカルタを使ってのカルタ取りがありました。全員参加のチーム戦でしたので皆さんとても楽しくカルタ取りをし、その絵と読み札の意味を教えて頂きました。

その中には「あるある！」と思う内容もあれば、「ああ、そうなのか！」と考えさせられる言葉も…。

まだまだ男社会の世の中ではありますが、「もうやめよう《女だから》の言い訳は」というカルタの言葉にドキッとさせられました。

意味合いとしては、責任を取りたくない時は社会の中の女性の位置を逆に利用してませんか？という意味なのですが…。男女平等と言いながら、まさしく「女だから…。」を言い訳にしている自分がいる。

そんないろいろなことに気付かせていただけた研修会でした。

組門徒会研修会

「組門徒会員の自覚と役割」

第五組林覚寺門徒　小林　義之

第三回教区門徒会員研修会が、五月十七日、高田別院を会場に行われました。

第三回ですが、この三月に教区門徒会員の改選が行われ、新しくなられた方がだいぶ居られたので、実質は第一回の研修内容でした。

華岡主事から、まず高田教区の寺院教会や組の数、総代・責任役員と組門徒会員との違い、任期などの全体的な話がありました。次いで組門徒会、教区門徒会、組教化委員会、教区教化委員会についての説明。そして、私ども一人ひとりがそれぞれ、次のような考えにたって行動してもらいたいという内容でしめくくられました。

―門徒会員として自ら率先して聞法し、門徒の代表のひとりであることの自覚をもって、寺院・組・教区の運営に積極的に参加し、宗門の教化推進の担い手となってもらいたい。責任をもって組や教区門徒会の研修会や会合に出席をし、有縁のご門徒に対する呼びかけや伝達に当たっていただきたい。―

最後に五味川教区門徒会長から、全国三十教区の改編のことや高田教区の抱えていることを、全国の教区の事例を通して説明がありました。

得度一泊研修会

「二日間で学んだこと」

第八組本覺寺　中一　八木　智那美

この一泊研修会では、さまざまなことを学ぶことができました。

まずはじめに、基本中の基本、白衣の着方。何度か浴衣を着たことがあったので、なんとか着ることができました。

次に、帯の結び方。私がやるとぐちゃぐちゃになってしまったので講師の先生からやっていただきました。後日、きちんと練習しました。

一日目の最後は、直綴の着方、たたみ方。これは本当に難しかったです。特にたたむのが大変でした。

最後にはミニパーティーをしました。とても楽しかったです。

二日目は主に、作法を学びました。スクリーンでとても分かりやすくて勉強になりました。お寺とは、すごく複雑で、たくさんの道具があるということが分かりました。

この二日間は、とても有意義なものとなりました。二日間で学んだことを決してムダにせず、今後に生かしていきたいです。

差別問題研修会

「差別問題研修会に参加して」

第八組延壽寺　鷲嶺　三代子

去る六月七日、第一組廣傳寺住職塩谷秀道氏、全国青い芝の会・片岡博氏からご自身のこれまでの体験をふまえて、「障害者差別について」お話を聞くことができました。

日本は、他の先進諸国より障害者に対する取組が三十年も遅れているといわれています。国際法である「障害者権利条約」も批准しておりません。

わが国には、小学生から特別支援学校に入学する制度があります。特別支援という名のもとに隔離された状態での教育といえましょう。しかし公立小学校へも入学できます。

私も一時期、自閉症の子どもとかかわったことがあります。その経験からいえば、障害の有無にかかわらず、小学校の時から共に学び、学校生活を送る中で子どもたちは、仲間として、友だちとして共に生き、関わり方を学ぶのです。大人になっても、「私に何かできることは、ありませんか。」と、障害者に声をかけられるのだと思います。

差別はいけないと知っているはずなのに、なくならないのはなぜか。

障害がなくてよかったと思う背後に実は、無意識のうちにいろんな差別をしているという自覚が必要です。

「生きとし生けるもの、すべて平等。水平なところに立てたとき、差別心は鎮まる」という仏教の教えに出遇えた研修会でした。

高田真宗学院一泊研修会

前期修練を終えて

高田真宗学院九期生　朝川　公徳

七月五日から十一日午前中までの日程で前期修練が研修道場にて行われ参加いたしました。

まず、日程の説明等があり、「求道者たれ、ともに求道者たらん」と

いう言葉が、日程表の表紙に書かれ、まさに、「求道者」とは何か、その答えを求めたい気持ちの一週間が始まりました。

日程は、晨朝に始まり、学習・攻究・声明作法・座談という朝から晩まで真宗の教えと自分の悩みの中で過ごした一週間でした。そして、共に過ごす志を同じくした仲間「御同朋」と時には厳しい意見のやり取りをし、また時には同じ悩みを感じ、非常に充実した一週間でもありました。

しかし、今回の修練で私自身が特別な何かを得られたのかというと、それはありませんでした。この修練に出れば真宗の教えがわかるかのように思っていましたが、それは、ありませんでした。そして、今もまだ迷いの中です。

合掌

聞思学場公開講演会

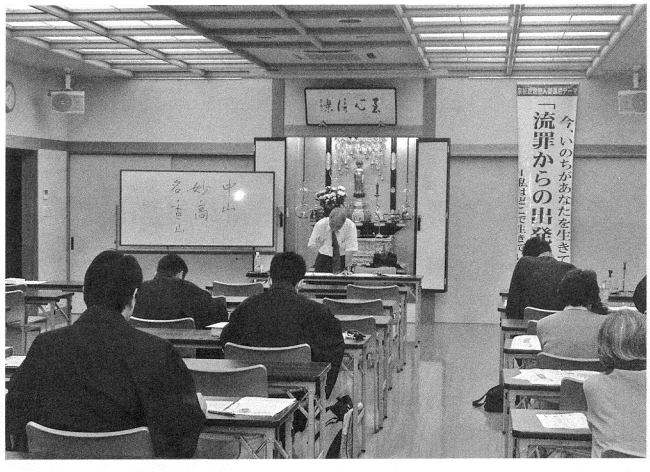
「曽我量深先生と伯母」

第一組寶光寺門徒　藤本　勝彦

私は富山市に生まれ三歳のときに大空襲がありました。戦後まもなく廃墟の中で復興が始まり、市の中心部に一つの小さな真宗の道場が建立されました。

そこへ曽我先生がたびたび説教に見えられておりました。伯母（父の姉）は熱心な真宗信者であり、特に曽我先生には心酔していましたので足しげく通っていたのを憶えています。若いころより言うに言われぬ苦労をしつづけた明治生まれの女性であり、満足な教育は受けていなかったと思います。あの難しいといわれる曽我教学をどのように理解していたのか不思議です。私には伯母と父の死後ドッサリと書籍が遺されましたが、死ぬまでに全部読めるか自信がありません。

このような環境に育ったこともあり、今回の深澤先生の講義にはなるほどと思ったことが沢山ありました。特に先生の資料にあった「天地は我と同根、万物は我と一体」につづき「今、いのちがあなたを生きている」の項で、ヴァイツゼッカーという学者で内科医の言葉を引用されたことに強く心を動かされました。まだ理解できないことも多くありますが、結論は「『生』は死に対する概念ではない。『生命』は決して死なないのです」と。



私のもとにある『曽我先生説教集』の中にも印象に残っている似たような言葉があります。「…だからしたがってこの一往生ということもですね、死なないということを一人間がおそれている死ですね、そういうものはないということをあらわした言葉に違いない。それがいつの間にやらですね、やはり人間が人間の迷いで死にたくない、と。死をおそれるというそういうことから往生というのを文字（もんじ）を間違うて解釈しておる。」と説かれています。

伯母は私が子どものころ「悪いことをしていちばん困るのは誰だ。」と質問しました。私は思いつくまま「父か母か、先生か、親戚か。」と、答えましたが、最後に伯母はやさしく笑いながら「ぜんぶ困るね。でもいちばん困るのは自分だよ。」と教えてくれました。今考えてみると、それは死んでも「自分」はつづくといっているのかもしれません。

そして晩年になり胃ガンの手術を拒否し、自分の死を見せたいといったか、見てほしいといったか憶えていませんが、皆にかこまれ従容として死につきました。私は残念ながら仕事で機上にあったため臨終には立会いできませんでしたが、妹の話では、女か男か分からないような顔になり、透きとおってとてもきれいだったとのことです。

愚僧のつぶやき

〈お内仏の荘厳編⑨〉

今回は灯明具であります金灯籠と輪灯を見てゆきたいと思います。金灯籠は阿弥陀様や親鸞様などのお顔がよく拝める様に、ご面灯（めんとう）として用いられてきました。電気のない時代の御堂は薄暗く、何日もかけてご本山まで参り乍ら、お厨子の中の親鸞様のお顔がよく拝めず残念に思っていたご門徒が多くいたといいます。そうした方々の願いに応えたものが金灯籠であった訳です。だから金灯籠を見るにつけ、『あなたも阿弥陀様や親鸞様に出遇うてほしい』という先達の方の願いを感ずることであります。

又、金灯籠の起源を尋ねると、遠くお釈迦様の時代までさかのぼります。ある夏の夜に仏弟子達がお灯明を点（とも）して読経していると、虫がそのお灯明の中に飛び込んできて、焼け死んでしまったと。それをご覧になったお釈迦様は、竹で籠（かご）を作らせてその中に灯明皿を入れて、殺生を防ぐ様に指示したと伝えられています。つまり金灯籠には、『命尊し』というお心が込められている訳です。

次に輪灯ですが、現在輪灯は浄土真宗独自の仏具となっており、真宗各派それぞれに特徴があります。本願寺では、東西分派前の親鸞聖人三百回御遠忌法要の際に取り入れたのが始めといわれ、それまでは前卓の左右に置灯台を荘厳していた様です。ただその数年前に本願寺は門跡

（13頁へ続く）

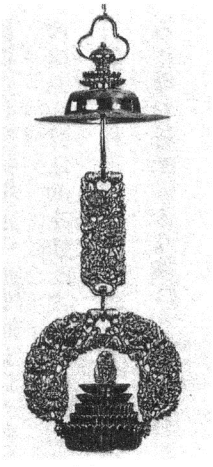


図35　菊輪灯
（本願寺派用）

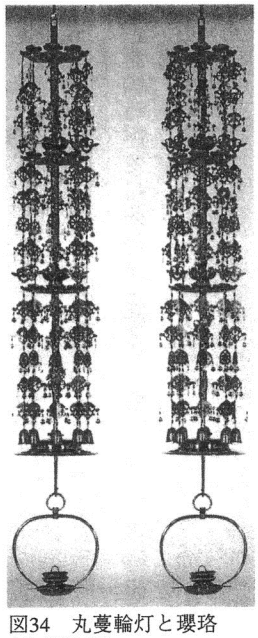
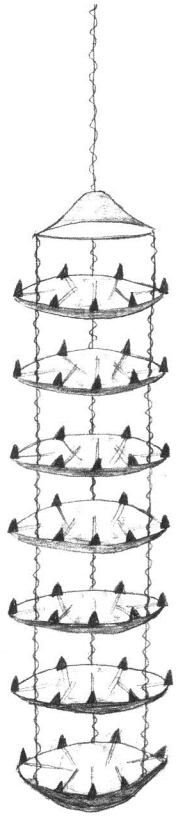
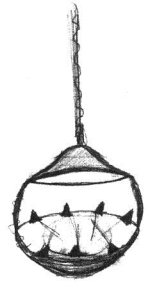


図34　丸蔓輪灯と瓔珞
（大谷派用）


（因幡薬師の輪灯　江戸時代初期）


（因幡薬師の輪灯　江戸時代後期）

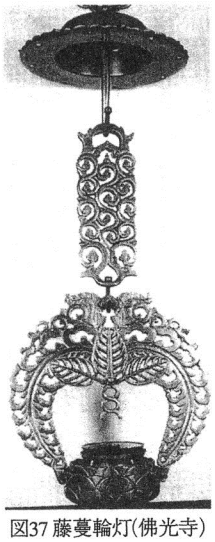


図37 藤蔓輪灯(佛光寺)

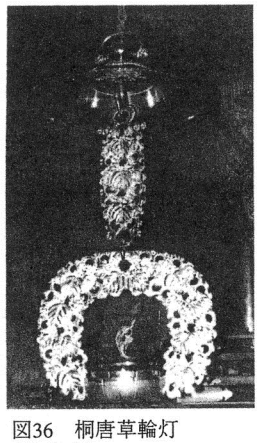


図36　桐唐草輪灯
（専修寺）

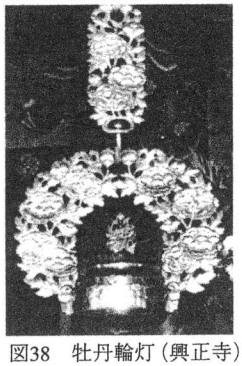
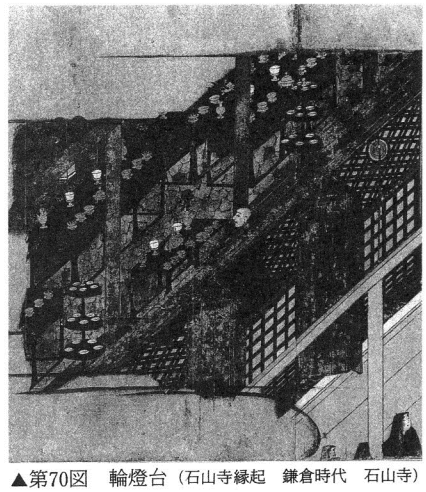
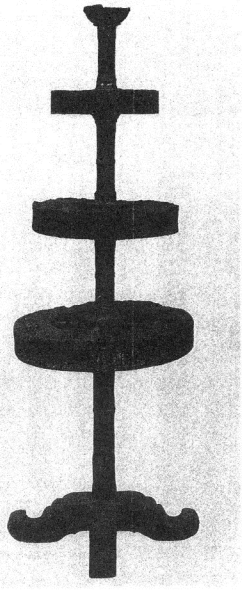


図38　牡丹輪灯（興正寺）


▲第70図　輪燈台（石山寺縁起　鎌倉時代　石山寺）


◀第71図　黒漆輪燈台（室町時代　高170.3cm　円成寺）
仏塔の相輪状をなし、各々の輪は回転できる。古くは輪燈（『兵範記』久寿2・2・1・5）、車輪燈（『栄花物語』治安3・3・10）と称されたもので、数多くの燈明を集中することにより燈供養をより一層効果的に演出することができる。

寺院となり、内陣の中を回り乍ら散華をする行道散華という作法が加わります。その時に置灯台が邪魔となり釣灯台である輪灯が取り入れられたと考えられています。ただ、本来輪灯というものは釣灯台を指すものではなく、車輪を横にした様な台の上に数枚の灯明皿を並べた所から、その名が付けられたものです。それが釣灯台を指す様になったのは、因幡薬師（平等寺）の巨大な七重の釣輪灯に由来するといわれています。ただ、それが原因で江戸時代に九回も火災となり、その輪灯の使用が禁じられ、簡略化されたのが現在の輪灯の原形であります。しかし本願寺は、単に他宗の仏具を取り入れたのではないんです。当時の因幡薬師の輪灯は、延命祈願の仏具でありました。そこで、それと区別する為に車輪の様な笠を輪形の蔓の上の方に引き離して、現在の形とした訳です。そこには、『人生は長さではない、深さである』という親鸞様のみ教えに叶う形を求めた先達の方の思いが込められていることであります。

（ペンネーム　維摩教信）

高田教区震災支援有志会

高田教区震災支援有志会代表　金子　光洋

いつも私たちの活動にご協力頂き、また響流の紙面にも毎回寄稿させていただく機会を得、有難うございます。

昨年の三月に会が立ち上がり二度目の夏を迎えました。最低でも月に一回は現地に行くことを基本とし、現在は第二十回の活動を行うまでになりました。活動先は主に宮城県石巻市寄磯浜と、福島県二本松市真行寺です。

青空市場委員会のお母さん達と（二本松市）

七月の寄磯浜での活動では、夏はやっぱりバーベキューでしょ！ということでバーベキューをし、次の日は海上タクシーを経営されてる方が仮設住宅におられるので、船に乗せて頂き近くの金華山迄行きました。寄磯浜とは違いまだまだ震災の爪痕が色濃く残っているところです。

ある意味では瓦礫が撤去され、更地になっているところが多くなり、少しずつ復興しているように見えます。ここに至る迄には想像もできないほど多くの人が関わっています。一方では復興しているが、もう一方では未だ先が見えない状況の方がいるのが現実です。実際に活動を通してみると、現実が片方からしか報道されていないような状況があるのを懸念しています。

さて、最近メディアを賑わせているのは皆さんがご存知のように原発の再稼働関連です。

有志会では「ZERO放射能食品を届けようプロジェクト」を実施し、提供いただいた食品及び飲料水を毎月福島県の二本松にある真行寺さんに届けています。全国から真行寺へ届いた食品は、青空市場委員会の方々が青空市場を開いてくださり多くの方の手に渡り、口に入っています。

昨年の原発事故以後、多くの不安を抱えながら生活している人々が福島にはたくさんいます。また、県外へ一時避難されてる方もいます。その原発被災者と呼ばれる方々の想いとは裏腹なところで再稼働となった感じがします。毎週金曜日に首相官邸前においてデモが行われ、多くの方が声をあげています。そのデモは、官邸前だけでなく全国に広がりを見せています。その声があたかも無関係であるかのように、相も変わらず再稼働へ向けての準備が着々と進んでいるように思えてならないのは、私だけではないと思います。私にはわからない理由で原発は稼働しているのでしょうが、私が原発に反対する理由は福島県の現状を垣間見、そこで多くの人たちと出会い、笑顔、涙、怒り、耳にしたことを忘れるこ

全国から集まった食品（真行寺）

とができないからです。原発は人と人を分断し、命を奪い、未来を奪い、絶望を与えることは原発の歴史が証明してくれました。なのに何故？という印象です。奪われたものの傷みや悲しみがわからないようになっている現状の中、しっかりと奪われたものの声に耳を傾ける必要があると感じます。耳を塞いでしまえば何も聞こえません。それは原発に限ったことではありません。

震災を通し、自身がいろんなことに耳を塞いでいたように思いました。塞がなくても聞こえないことの方が多いですが、聞こえてきたところからしか始まらないのでそこを出発点としてこれからも有志会は活動して行きます。

バーベキュー風景（寄磯浜）

教務所からのお知らせ

完納御礼

二〇一一年度宗派経常費（相続講金・同朋会員志）を御進納いただき誠にありがとうございます。

ここに、完納いただきました御寺院名を御披露し、御礼にかえさせていただきます。

第2組
　來遊寺
第4組
　常見寺
第5組
　善正寺
第11組
　専敬寺　大嚴寺

（二〇一二年四月一日～六月三十日）

以上　五ヵ寺

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌御修復懇志金御依頼額を完納いただき誠にありがとうございました。

ここに、完納いただきました御寺院名を御披露し、御礼にかえさせていただきます。

第2組
　來遊寺
第4組
　常見寺
第6組
　本覺寺
第7組
　得法寺
第11組
　照源寺

（二〇一二年四月一日～六月三十日）

以上　五ヵ寺

●おくやみ申しあげます

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

第1組　雲晴寺前坊守　水莖キヨエ
第6組　西安寺前坊守　了函　照子
第7組　康源寺坊守　宮本　一枝
第7組　廣建寺前坊守　宮川　花子

●おめでとうございます

◎住職任命
第3組　大泉寺　比後　孝
第13組　惠光寺　上野　裕文
◎教師補任
第6組　法林寺　礪波　翔
第6組　光運寺　南　さやか
第7組　専念寺　堀河　真淳
第13組　願專寺　經塚　清
◎得度
第1組　清雲寺　渡邉　顕哲
第8組　蓮淨寺　森尻　真輝
第13組　淨嚴寺　古川　達雄
◎婚儀
第11組　妙玄寺様

◆こもれび◆

紫陽花がうつくしい色を放つ梅雨の季節が終わって、本格的な夏を迎えます。例年雨で悩まされていましたが、空梅雨でありました。夏の猛暑には、お盆の行事が行われます。

昔、都会に働きに出ていた奉公人たちは八月のお盆に帰省するのを楽しみにしていました。都会では七月にお盆をして八月に奉公人を帰すために、一ヶ月早く行うようになったそうであります。

中山間地のお盆は、この時は人がいつもより二倍にも三倍にも膨れ上がります。お盆行事が復活している地域があります。

高田教区では、教区議会が終わり新年度予算が採決されました。教区門徒会の改選で各組からの役職者も決まりました。「参加者のひろば」での投稿は新鮮であります。研修会に参加してその感想を編集部まで届けてください。（坂井）